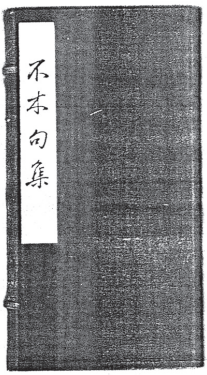
『不木句集』について

湯本明子

平成十七年初夏、古書即売会のカタログ中に『不木句集』を見付け注文したところ幸い入手できた。



句集は私家版、帙入り、布地は紺色。縦横それぞれが24、14センチの縦長。本誌は帙とほぼ同寸和綴。袋状となっている。全57ページ。

表紙の次に、書斎で寛ぐ小酒井不木の和服姿の写真が掲載されている。

ついで(はしがき)に国枝史郎が、次のように述べている。〈故小酒井博士が多能多趣味の人であられたことは世間周知のことであります。俳句にも趣味を持たれ多くの名句を詠まれました。ここに蒐めましたものはその一部でありま す。端的に率直に自己を表現する文学として、俳句ほど適切なものはありません。十七字の中に作者の人生観、社会観宇宙観を盛ることが出来るからです。この集を読むことによって私は故博士の面影を新しく思ひ出すことができました。それは高朗にして飄逸であった俤であります。

手向句

鶴立ちて後に抜毛もなかりけり

国枝史郎〉

日付は昭和四年五月となっている。

次ページには「不木」と朱印の落款がある。

続いて不木句集　目次

春（一頁）、夏（一六）、秋（三〇）、冬（四一）、短句（五一）と分かれ、句には各々上段に季語が付記、春六三句、夏六二、秋四五、冬四〇、短句二六が掲載。

その年の八月中旬、不木を追って海部郡蟹江町歴史民俗資料館を訪ねた。その折、そこで入手した『年報』（平成十五年度の歩みをまとめた第二十五冊、平成十七年三月刊）に掲載された小酒井不木の経歴について述べてみたい。

小酒井不木、本名光次（みつじ）。

明治二三（一八九〇）年十月八日、愛知県海東郡新蟹江村（現海部郡蟹江町）小酒井半兵衛の長男として出生。

彼の父は村長や郡会議員も勤めた、地元でも有数の大地主であった。自伝では「何の特色もないところに生れたごくごく平凡な男」と自己評価しているが、それとは裏腹に幼少の折より非凡な性質を発揮し、周囲からも大地主の息子として何事にも特別扱いされ、同年の子供と遊ぶより近くの寺で大人を相手に「地獄極楽物語」を創作し、説法していたといわれ、後の作家としての素質の一端が、この頃から見受けられる。

明治二八（一八九五）年四月、新蟹江尋常小学校に入学。普通より二年早く入学したのは、毎日のように学校へ遊びに来ていた光次と親しくなった校長が、「坊や学校が好きか」との問いに「早く一年生になりたい」と答え、入学となったようだ。

当時は政府が就学について特別に力を入れていた時だったので、こんなことも可能だったのだろう。

明治三二（一八九九）年、蟹江尋常高等小学校に入学。

二年後、愛知県立第一中学校に入学。

その三年後父親が死亡したため、学校を中退し地元の役場に勤めることになっていたが、当時「マラソン校長」と言われた日比野寛校長は、開校以来の秀才ぶりで、常に首席を通した彼の才能を見込んで母親を説得し、引き続き勉学を続けることができたという。

明治四〇（一九〇七）年三月、愛知一中を首席で卒業後京都の旧制第三高等学校へ入学。

この時母テツは大反対だったが、むしろ父半兵衛の後を継いで大地主小酒井家の当主となることを望んだが、この時も日比野校長がテツを必死に説得し、進学可能となったという。

蟹江を離れた不木はこのことから、母に遠慮し最低限の送金を受けるだけの慎ましい生活を送ったようだ。

京都三高では一年後輩の古畑種基（後の科学警察研究所長）と知り合うこととなる。

明治四三（一九一〇）年、京都三高を首席で卒業、今回も母の反対に遭うが東京帝国大学医学部に入学。

本郷弥生町の学生下宿でも慎ましい生活のなか、参考書代を稼ぐため、京都の日出新聞社へ『あら浪』と題した小説を売り込んだ。

東京帝大でも首席を続け、大正三（一九一四）年、同大

学院へ進み、生理学・血清学を専攻し研究に没頭した。

この頃、海部郡神守村（現津島市）の素封家、鶴見楽太郎の長女で、東京女子高等師範学校に在学していた鶴見久枝と知り合い（不木の熱烈な一目ぼれという）、大正四年一月、帝大教授永井潜の媒酌により結婚。

この結婚には母も大賛成だったようで、これを機に小酒井家の主として蟹江に戻ってくるだろうとの期待があったが、二人の結婚の前に亡くなり、その期待は実現することなく終った。

大正四年六月、不木は永井教授の紹介で『生命神秘論』を洛陽社から出版、医学研究者としての著作活動がスタートした。そうした旺盛な研究活動は「永井博士以上の天才」との評価を得、医学者としての彼の将来は前途洋々たるものに思われた。

しかしこの年の十二月突然の悲劇が彼を襲う。〝肺炎〟を病み妻と離れて、片瀬海岸で療養生活を始めることとなった。当時の医学では絶望的な状況であった闘病生活の中で、探偵小説の萌芽とも思われる「想像は創造である。自分は創造的な科学の預言者でありたい」との記述がなされている。

半年ほどの療養で健康を回復した不木は、大学院での研究生活に復帰、研究実績が認められて大正六（一九一七）年十月、二十七歳の若さで東北帝大助教授を拝命。

同時にアメリカ・ヨーロッパへ衛生学研究のため留学。

横浜からサンフランシスコへ向かって出航。アメリカのボルチモアの病院で研修。

翌年三月には探偵小説家エドガー・アラン・ポーの墓参を行なっている。その後ニューヨークのコーネル大学で血清学と都市衛生学に取り組んだ。

大正八年六月、不木はアメリカからイギリスに研究活動の場を移した。

しかし無理な研究がたたりロンドンで喀血。ブライトン海岸で療養中、イギリスのコナン・ドイルの作品に接し、探偵小説の世界へと傾斜していった。

後の『文学随筆』に述べているが、「事件解決」と「治療解明」には視察力と想像力が必要で、探偵小説を読むことは、自分の研究にも役立つだろうと考えていたようだ。

その後小康を得てロンドンに帰ったあと、パリのパストゥール研究所に席を置いたが、再度喀血した。

その年八月、再び小康を得たので、マルセイユ経由で帰国の途に着き十一月神戸に。

彼が帰国するとのことで、十月東北帝大教授の辞令が出ていたが、全快していないため任地に赴くことなく、妻の郷里の神守村で療養。

大正十（一九二一）年九月、医学博士の学位が贈られた

が、療養生活を続け任地へ一度も赴くことなく辞任した。

著作『闘病術』は、医学者、結核患者として自らの体験を生かしたもので、患者の立場に立った書物として、当時の大ベストセラーとなった。

不木は妻の郷里で療養しながら、大正九年『学者気質』という随筆を新聞に連載、以後欧米の探偵小説を紹介。

それにより当時雑誌『新青年』を、探偵小説的なものにと構想していた編集長森下雨村と交流が始まり、大正十二年になると病気がやや回復。

名古屋市御器所町北丸屋に住居を新築、本格的な執筆活動が始まった。

大正十三年『真夏の惨劇』以降は、小酒井不木というペンネームを用いるようになった。その由来について、彼の著作にはまったく記述がないが、蟹江町の後藤道政に宛てた書簡の中で、「不」の字に頭を付けると「木」の字となり、つまり「不」は頭を引っこめた貌（かたち）、「木」は頭を出した形であるとのことで、医学者として小説家として、これからの活躍を期待されていた不木の意気込みが感じられる。この雅号は、中学生時代に漢文の中で見付けたものを、そのまま使っていたようだ。

そしてこれ以後、多くの同じ探偵小説家との交流も活発となった。

その一人、後の大作家、江戸川乱歩との出会いは、大正十一年に乱歩が「新青年」に応募した『二銭銅貨』について雨村から欧米の翻訳物ではないかとの問い合わせにより乱歩の作品に接して彼を絶賛し、推薦文を書いたことから始まった。

まだ本格的な探偵小説が誕生していない時代、探偵小説の将来に不安のある乱歩に、それで生計を立てることを勧めた不木。そして乱歩も医学研究書の執筆やドイルやドゥーゼなどの翻訳活動が中心だった不木に、熱心に創作を勧めることとなり、二人の交流は日々深まっていった。

その後、その豊富な医学・科学的な知識と犯罪心理を描写した内容の『人工心臓』は、日本における最初の純ＳＦ小説として名高い作品である。

一方、少年が事件を科学的な知識で解決していく、少年探偵小説『紅色ダイヤ』など発表、広い層のファンを得ることとなった。代表作品には『恋愛曲線』『疑問の黒枠』『印象』などがある。

昭和二（一九二七）年には『竜門党異聞』が帝国劇場で上演され、十一月には不木の提唱により合作組合「耽綺社」を江戸川乱歩、長谷川伸、土師清二、国枝史郎ら新進作家と結成するなど、新たな取組も行なっている。

昭和初年頃、弟子の岡戸武平に「遊び半分の句会をやろうじゃないか、仲間を集めてくれ」とのことから始まった

会は、不木書斎の扁額「拈華微笑」（仏教用語で以心伝心の意味）から、彼が「拈華微笑」（ねんげ句会）と名付けたもので、今も名古屋地方の、文人名士の俳句愛好者の集いの場となっている。

一時諦めていた医学分野でも、昭和三年自宅の空き地に研究所を建て血清の研究も再開した。

しかし無理がたたったのか昭和四（一九二九）年三月二十七日に風邪で発熱、病状が悪化。

昭和四年四月一日、急性肺炎により、惜しまれつつ三十九歳で逝去。

死後、不木と交友関係にあった江戸川乱歩、岡戸武平らの手で不木の遺作を編集した『小酒井不木全集』が発刊されることになり、乱歩、武平らはかつて不木から受けた恩もあり、遺族が全集の印税で生活出来るように尽力した。

不木全集は昭和四年に全八巻が当初出版、その後増巻され、全十七巻という未曾有の大全集となった。

次に「不木句集」の内容を少し紹介してみたい。

春　初　陽　恭しく雲整ひて初陽かな
　初東風　初東風や乳母すこやかに箸をとる
餘　寒　ねころびて読むには早き餘寒哉
春　宵　千金の子の惜しみけり春の宵
暮　春　ゆく春を亡命客と語りけり
　立春のあとの寒さは、ゆったりと寝転んで読書するには間がある。暮春に語り合った亡命客とは誰だったのか。
　陽　炎　陽炎や笑ふごとくに鬼瓦
　朧　月　ぬき足の背戸をあくれば朧月
　水温む　読みかけし八犬伝や水ぬるむ
春　愁　春愁やかきむしりたき帯の下
鬼瓦もかげろうには、面が緩んだことだろう。春の到来は浮きうきと華やぐ反面、何となくもの憂くなり、手の届かぬ焦燥感も内に抱え込む。
　花　花の坂肥満の友とのぼりけり
　　小坊主も来てくるひける花見哉
　蒲公英　蒲公英や人魂出るときく屋敷
桜花の坂道と、肥満の友人との対比が楽しい。花の下、積もった日頃の鬱憤も晴らしたかったのだろう。
　夏　雷　垂れさがる蜘蛛たゆたふや遠雷す
　夕　立　夕立や三味線かつぐ旅芸人
　夏の風　ふる郷に脚気癒えたり夏の月
　夏の水　うは言のやうに舟打つ夏の水
　青　田　嫁入の荷も吹かるるや青田風
遠雷にいち早く反応する蜘蛛。急の夕立に旅芸人の慌てふためく様子。水郷の故里、舟べりを打つ音をうわごとと感じたのは、自身病んでいた頃か。
　天瓜粉　潮風や父も手伝ふ天瓜粉

蚊　俳論の尽きず蚋蚊を叩きけり
桐の華　故郷や母の背中に桐のはな
時　鳥　駒形やふりかへりみる時鳥

逃げ足早い風呂上りの子との、微笑しい光景。時を忘れての論客達は、蚋蚊には格好の対象。ふるさと、母、そしてうす紫の桐の花、懐かしい風景が広がる。ほととぎすの句は、高尾の〈君は今駒形あたり時鳥〉を思い出す。

秋　夜　寒　脛うちて痛きに叫ぶ夜寒哉
秋の暮　狂い女の口ばたの血や秋の暮
稲　妻　稲妻や夢遊病者の屋根伝ひ
新　藁　新藁の陰に声ありかくれんぼ
秋の灯　春信や裾野ちらつく秋ともし

当時、こうした狂女が徘徊していたのだろうか。次も凄みのある句。鈴木春信の極彩色の錦絵のなまめかしさ。

虫　銭湯のやうやく果てて虫の声
秋　草　秋草に寝犬と見しは人の子よ
西　瓜　村芝居西瓜を喰ひて別れけり

日常の何気ない風景が、虚飾なく詠まれている。

冬　冬の夜　冬の夜を職業婦人などの来て
冬の雨　冬雨や鋪石にうつる高足駄
霰　前掛にうけし霰を見せにけり
冬の月　落語家の俥や木戸の冬の月
寒　詣　星一つ西にすべりぬ寒詣

冬の夜、訪ねてきた職業婦人とは、どのような職種の人なのか。近頃ではあまり見掛けない霰だが、前掛に受けて見せにきたのは、女の子だろうか。

短　句　心中の記事に気のはずむ春
蝮出そうな茂りなりけり
汽車のとほりしあとを鳴く雁
花咲爺をやとひたき冬
赤い襷が豆腐屋をよぶ
白帆が一つ暮れのこる海
義歯のせてある鏡台の隅
卵の殻に親の顔かく

短句とは、連歌、連句などで短歌の下句に相当する一四音の句。この短句は、不木が、時折木下杢太郎氏等と共に試みた連句の面影を偲び、彼独特の異彩を窺うべく附載したようだ。

巻末に石田元季が〈故人の句稿手控などから、この二百十句を抄録し、大体、時候、天文、地理、人事、動物、植物の順に序列いたしました。そして那須茂竹氏の示教によりて、次第を定め遺ちたるを補ひ就正の句を載せることを得ました。（中略）〉。日付は昭和四年五月二十日。

不木は同年四月一日病没ゆえ、死去間もない時期に、句集が編まれたことになろうか。

残念ながら奥付がなく、発行者（所）名、発行年月日、

編者名などの記述がない。

なお以前蟹江町歴史民俗資料館を訪ねた折、中日新聞の切り抜きを手にした。（平成十六年十二月二十五日付）

それには同資料館が不木の残した自作俳句の控え帖『折折草』を新たに入手した、とある。

多才な不木の一面を伝える貴重な資料として話題を読んでいる、と。

その『折折草』は、和紙を閉じたＢ６版ほどの大きさの控え帖で、七十四ページにわたって、不木自作の俳句二百九十句余が自筆で書き留められていて、未発表の句も多いという。

いつか機会があれば、それらも紹介したい。

彼の俳句作家としての句域も、更に広がることだろう。

（ゆもとあきこ）



木不井酒小